

春燈下の記

島本八郎

春昏灯下の記

島本久恵

春昼灯下の記

昭和四十九年九月二十日第一刷発行

著者 島本 久恵

発行者 井上 達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話東京二九一―七六五一(代表)

振替東京四一二三郵便番号一〇一―九一

明和印刷 和田製本

© 丸島本久恵

Printed in Japan

0024-11041-BOOK

目次

出雲	九
その夜の歌舞伎座	二五
武奈ヶ岳	二六
棋と人	三六
人と作品	四四
赤穂まわり相生以西	五五
雲水	五二
歌と愛と	五四
麦と彫塑と	六〇

海に向かう墓

古典の細みち

木ぐつの仲間

桶の桶直

極地

明治から大正へ

黄薔薇の印象

牧童逝く

弔電の歌

実証の人生

萬水居士三七日追慕

黒光さんのこと

三 六 九 二 五 八 一 四 七 〇 三 六 九 二 五 八 一 四 七 〇 三

酔茗のあとに残って

二〇三

時、人の移りに

二〇七

蘇鉄色の酒杯

二一〇

灰燼記

二一三

外島劉氏のこと

二一五

風説

二一三

すずらん輸送

二一六

別離漂泊のなかに

二一七

帰心

二一九

雪

二二七

秋の一夜

二二〇

質

二二五

むさし野の遠太鼓 三〇

うたものがたり 三九

大銀杏のもと 三三

「長流」拾遺 戻橋のみち 三五

「長流」拾遺 戻橋二度目 三六

「長流」後記別記一 三九

「長流」後記別記二 三六

「長流」後記別記三 三六

地図 三六

一管の空洞 三七

「貴族」拾遺 三七

「女医事始」について 三六

「江口きちの生涯」あとがき 三九

江口きち二十年忌に 三二

初稿発表紙誌一覧 三四

表紙装画 竹久夢二

春昼灯下の記

出雲

私はその時の旅が、ただの山水行旅でなかったことを、ひきしぼるような痛さで思い出す。

「広辞苑」によれば、貧相な零落姿の男をば山水男さんすいおとこと言うと。また夏冬なしに涼しそうな山水な住家といえ、その家のくらしのほどが分かる。その山水な住家に日本中が変わるのだった一あし前、ほんとうはもう前ではなくてその時の中であつたので、人びとが盛んにユーモアをとばし、外を歩くと毅然と皆が肩を張っていた、生活の零落に堪えることを誇りとしていた、一応そのような達観を装うよりほかなかったのである。みなすでに瘦せて来て居り、軍人を別としてはいづれか山水男ならぬはなかった。昭和十六年十一月末、国民は知らなかったが、十日すれば真珠湾のあの事があつた。

その時になつて、私を呼んでやまない山河があつた、山陰の出雲の奥へ忽卒と急いだのだった。

——今日来ずば明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや——古歌の思いが胸を打つ、

まことに一ときの猶予もならない切なさであった。

嚴重な通達によって庭に防空壕を掘り、これも通達による自給自足の菜園をひらいて馬鈴薯のたねを伏せ、体のない力をしぼっての労働に疲れきりながら、なお生きいきと遠い呼び声に引かれた。山河まさに荒れる、一目眼におさめに行くのに明日へ延ばしはならないのであった。

出雲の能義郡に大国主命が——青垣山守る——と歌って名となった母里の郷がある。そこに東母里八幡西母里八幡の両社があり、応永年間、国司の広江兄弟がいつくところであるという。長男が或る書の中からみつめてくれた僅かな記録、ほんとうにそれだけのぼつんとした記録で、広江氏が果たして国司として実在した人物であるなら、もっと何処かに出ていそうなものを、野史にも何にも見えないのである。ただ妙な暗合が私の父の家の言い伝えにある。父の生家は備後福山在、戦国時代に何か大きな移動で出雲から脊梁山脈を越えて来て、この海近くに定住したと、そして姓が広江であった。後で分かってみると、家系の中の広江五郎左衛門貞春という人の条に、枚原盛重内とあって知行千五百石の明記があり、枚原氏落去後出雲の内湯木と申すところにて相果てとある。その弟では伯耆大山で僧となって宗仙といった人がある。そして当然その間の運命的動き、一種悲哀の人生観というようなものが、私のどうもあの父広江千代吉に、あの性格あの生き方にあったのが浮かぶ。どうも出雲は呼ぶのであった。

そして私は『長流』の第五巻で、父の中にあつた流れを探ぐりたく、また書く順がそこに来ている。頭に描くところには行つて実地を踏まねばならぬ、それが私の作の態度であつた。もちろん国

土は直接破壊を受けていなかった。けれども恐ろしいのはそれより自壊の作用の方で、要塞化防空化、ものは自然な旧の保持をばゆるされない、そして日に著しくそれが速まる。急ぐのであった。

そして私は出雲に行つて何を感じたか、国は大事の下にあつて、そしてそれがこの何という素直な尋常な処理、風景人事ともに静かで整頓が行きとどいている。ばかりかこの時にもものがねんごろで、旅の私などにも頬かぶりを取つて挨拶してくれる。刈田の農夫がそれなのであったし、用水の規矩正しい、また水の澄んだ、実にこの母里という山ざとの美しい、母里の名がそっくりなものと。郷土研究家で「郷土母里」の編者でもある陶工の早亀さんを教えられて、そのお家をたずねる道の花崗岩の石段、それを上がつて詣るようにまつられている墓所の塵も据えぬたはずまい。その道からは下りて入るのである早亀さんのお家の、林に巻かれて虔ましい平屋であつてそのすがすがしさ、朝早いのに残りなくお掃除が済んでいて、霜月末の冷気に、洗つたような清浄さ、また外の林の落葉というのが、これが落葉かと思われるほどに、落ち敷きような美しい、むさし野の林の下のがさつさからは思いもならない行儀なのである。落葉掃きといつてそれがたまたまのことではなくて、毎朝夕のところがけ、それだからおのずからこのととのいが出る。見惚れてというより心打たれてしばらく去りかねる、東京では防空壕と自給畑の掘り返しで、道もあぶないこの今である。

早亀さんは出迎えられて、山の窯に行かれる支度のところであつたのを、奥へ通しておたずねに答えて下さる。やがて私を亀遊山上の東母里城址へ、更に卯月の谷の奥の檀原城址へ案内、ともに伝説以上には残っていない広江氏に、今後は共に研究を、そして発見があれば必ず報告し合ひまし

ようと約束せられ、無理な来ようをしたのではあったが、おかげさまで来た甲斐は充分であった。

卯月の谷をのぼりながら、ところどころ谷の中段に見られた農家の、小さくていて閑雅な、折柄の氷雨もよいに山茶花の木の振りから花のつきようからのおとなしさ、山峡の風物がはびこりも荒らびも、垣一重で押さえた、そしていて段々の迫田きだのこしらえかた、みのらせかたの何処にとどいていないものもない。言わずとも善政の間不昧公が示されたもの、教えられたもので、ここで見ると茶が、茶の精神の人間を生かした姿に逢えたところがほかにあつたらうか、実にそれこそ敬虔な生命享受の清麗さ、また実に櫨かのもみじが、檀原の檀の秋色が、ひそつとそこにかかるのであつた。

やがて谷を戻り、伯太川堤を安来に出て汽車で松江へ、一泊。翌朝は宍道しんじに出て木次線きすぎで脊梁山脈を越え、一日がかりで夕方に備後神辺に着き、刺繡屏風さながらの神辺城址紅葉山を見、そして菅茶山が黄葉夕陽村を歩いた、居ない間の東京を気にしながら、気をせきながらの二日であつたが、しかもこの間に私は始終、一人のまぼろしの旅びとを前にうしろにまたかたわらに感じつつづけていたことを言い落としてはならないであらう。

まぼろしはアメリカの人、三十年前まだ健在の高橋箒庵氏がお話で、知らせていただけた、それ故ほんとうにまぼろしとしかいえない人で、ここにその時ご教示のお手紙がある。

拝啓仕候、陳者過刻は甚だ失礼いたし候、其節申上候米国人は、デトロイド産にてチャールス・

エル・フリヤと申候、フリヤ氏は光悦崇拜者にて、ワシントン府に、日本美術館を寄進したる特志者に御座候

利休の逸事は別紙の通りに見え居候

先は右得貴意候 勿々頓首

箒庵

四月初七

島本久恵様

侍曹

私の見えない同行者はこのお手紙の中のお人、米人フリヤさんであつた。光悦崇拜者として日本の茶人もゆるすのであるこのお人が、想像し、おもいにあたためて久しかったのであるう日本に、真の姿を見ようと渡来し、人にも会い、名所をたずね、名品に接し、殆んど日本中を旅したあと、残るのはただ失望、これこそ日本美というめぐりあひは、ついに空しいかと力も落ちるところであつたが、この上は新しいものとかぬ山里、山家を見よう、そこには或はと、わざわざ全くの一人で出雲の不便な山の奥まで、谷、坂越えて分け入つたのであつた。それにしてもフリヤさんは言葉はどうであつたのか、不自由な黙つた孤独の山行で、山あいの里から里を求めて歩き、日が暮れて、一つ家の小さな軒端によつて行き、その夜の宿を乞うた。出て来た主婦はおどろき、はじめて

見る外国人にどうしてよいか困るのであったが、しかし考える様子で、「お断りすればこの山中です、野宿をなさるほかありません、それよりはきたないところでも屋根の下でおやすませ申しましよう」といつて中に入れ、床をのべ、蚊帳を吊ってくれた。フリヤさんは家人が話す声や、朝の支度をしておくのらしい物音を蚊帳のむこうに聴きながら寝たが、夜なかに目がさめて見ると蚊帳のすみに何か青く光るものがある、またそれは息をするように明滅する。分からなかった、心にまるで用意がなかった、怪異に思えた。

呼ぶ声で主婦が起きて蚊帳近くまで来てくれて言った「この山なかで、夜なかにお寂しかろうと思ひまして螢を入れておきました」と。フリヤさんはさてはとよろこび、これこそが私の探がす日本であった、出雲に来てようやくこれに会えたと、それは話されたのであろうか、旅行記に書かれたのであろうか。

箒庵さんは、一つには利休の南坊録から雪の晨の逸事を引かれると共に、フリヤさんのこのお話を、それは茶のころをとお願ひしたのへ、お答そしてご教示であつたことである。

私は歩けなくても、夢にでもよいまたあの山の、谷の、水の、出雲へ行つて見たい。またフリヤさんのまぼろし、その足跡をたずねてさ迷ひ、そして私もその一びきの青い螢にめぐりあいたい。夢はいつとて変わらぬのである。